



J A C, K 2 登山隊の植樹・パイユにて 朝日新聞社提供

# 「ヒマラヤに緑を取り戻そう」 を合い言葉に

遠藤京子



1998 年(平成 10 年)  
4 月号 (No.635 )  
社団法人 日本山岳会  
The Japanese Alpine Club  
定価一部 150 円

## 目次

「ヒマラヤに緑を取り戻そう」を合い言葉に…………… 1  
 カンチェンジュンガ登山隊社行会 4  
 全国支部事務局担当者会議…………… 5  
 今西邦夫氏ネパール名誉総領事に 5  
 カンチェンジュンガへの道…………… 6  
 海外の山…………… 9  
 報告  
 総務委・晩餐会特別企画展…………… 8  
 資料委・幻のピッケル…………… 8  
 科学委・山で役立つ天気の見方 8  
 図書委・山岳写真のなぞ解き…10  
 データバンク研・ホームページへの  
 接続方法……………11  
 三水会・越生梅林～高山不動へ12  
 東西南北  
 二本の「山内」のピッケル……………13  
 里山ブームは自然保護なのか…14  
 ファン山群を歩く……………14  
 俳句・早春の上州・吾妻耶山…15  
 心響く人々……………15  
 チベットにて……………16  
 検証「静かなる山」第一部……………17  
 図書紹介……………18  
 ネパール国際山岳博物館募金……………20  
 新入会員・図書受入報告……………20  
 会務報告……………21  
 ルーム日誌……………22  
 INFORMATION ……………23

▶日本山岳会事務取扱時間  
 月・火・木・土曜日 10～20時  
 水・金曜日 13～20時  
 ▶図書室開室時間  
 日曜・祭日・月曜日を除く毎日  
 13～20時

パキスタン北東、カラコルム山脈で植林を続けて今年で六年目になる。世界第二の高峰 K2 やブロードピーク、ガッシャブルム、チョゴリザ、バルトロカンリなどの秀峰が居並ぶバルトロ氷河の舌端に近いパイユキヤンプ地と、その下流ブラルド川流域の標高二五〇〇～三〇〇〇メートルの四方村に植林地を拓いてきた。

■絶滅に瀕している  
 ビャクシンとカンバ

パイユ(三四〇〇メートル)は、現在高木が残っているバルトロ街道最奥のキャンブ地である。岩山から浸み出る一条の清水に生命を託して、ヒノキ科のビャクシン、ダケカンバ、ヤナギ、ドロノキに似た自生種のポブラ (populus cialata) が筋状に見られる。株立ちのダケカンバの足元には小さな湿地が形成され、数株

のサクラ草が咲いていた。九三年六月、ブロードピーク登山の折、残存する樹木を調査しながら、この水流に沿って登って行くと真っ直ぐ伸びた大きなビャクシンが一本見えた。立派な木が残っているものだ嬉しくなって近づいていった。幹をなでながらその裏側に回って「アア」と息をのんで立ちすくんだ。何と裏側は斧で削られていたのだ。無惨にも傷口は幹の半分にまで達しているではないか。すでに葉は水分を失い、いくぶん黄ばんで見えた。もう死ぬ！ こんな立派な木が。翌年、倒れたこの木の直径を測ると一六〇センチもあった。惜しい。悔しい。この想いが私をバルチスタンの植樹に通わせている。

しかし、ビャクシンの挿し木は難しい。実生の二年目の種が、土の中でさらに二年後に条件がよければ芽

を出す、というから容易ではない。ダケカンバも挿し木では活着しない。今年の実生を試みるが、発芽率は一〇パーセントと低いのだ。

こんなに増やしにくい樹を切っただけいけない。切らせてはいけない。

登山隊やトレッキング隊の荷物を担いでお伴をする大勢のポーターたちは、パイユで二泊して、この先バルトロ氷河の一週間にわたる行軍に必要なチャパティを焼くのが習慣になっている。その上、氷河の中でお茶を沸かす燃料として、削りとったビャクシンの木片を担いで歩いている。百年以上も前から続いている先進国の探検や登山、山旅の歴史の中で、隊員は早くから石油などの化石燃料を使っていたようだが、ポーターに燃料を与えていなかったことが、取り返しのつかない最大の失策であったと思う。

『岳人』の編集長、永田秀樹さんは一九七七年、パイユの一つ上のキャンプ地リリゴで、いくつかの切り株を見たという。以前にはリリゴにも高木があったのだ。今では切り株すらない。このままではパイユの木がゼロになる日はそう遠くないだろう。登山隊、トレッキング隊は、ポーターに石油とコンロを与え、木を切らないように指導してほしい、と訴えている。九六年のJAC・K2登

山隊（山本篤隊長）と九七年の東海支部のK2南西稜隊（田辺治隊長）は実行してくれた。

しかし、実をいうと、石油コンロで焼いたチャパティはおいしくない。コンロの調子がよくないと、ポーターたちはすぐに薪を探しに行く。チャパティを焼くには炭を配給し、お茶は石油で沸かすのがよいだろう。

#### ■塩を吹くパイユの植林

バルトロ街道の植林を始めると私が宣言したとき、最初に「やっくれ」と言って会員番号一番になってくださった故吉沢一郎翁が「パイユじゃない、パユだよ。バルティ語で塩という意味だ」と言われたように、樹木を失って乾燥した土は塩を吹いている。

砂漠の植林を手がける専門家は、「塩砂漠では植林はできない」と言われたが、現地に残っているヤナギの挿し木をやってみた。AKRSPというパキスタン最大のNGOのスカルド農場からも、苗木の提供を受けて、九四年には段々畑の水田を造成して植栽した。四月から十月の間、管理人を置いて水を流し続けた。翌年はまだ畝に真っ白に塩が浮き上がっていたが、ヤナギは生きていた。その翌年、やっと塩が洗い流されると同時に、ヤナギは一気に伸びて、

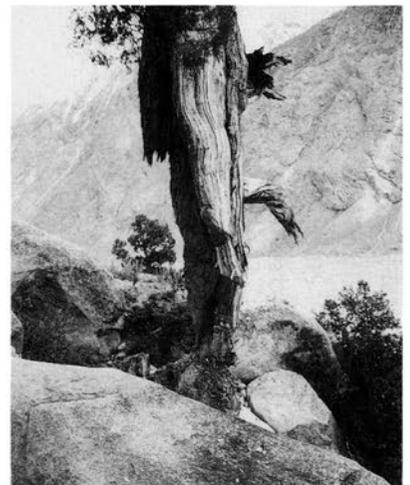
三〇三・五メートルの高さになった。パイユ自生種のポプラと自生しないスカルド農場のポプラを試みているが、活着率も成長もヤナギのようによくはない。

#### ■ポーターたちの村で植林

パイユは人が住まないキャンプ地だが、ポーターたちが植林の重要性を理解

し、自主的に植林してくれるようにと期待して、九三年から右岸最奥のアスコレ村で植林を開始した。約三百平方メートルの小さな畑を借りてヤナギとポプラを二千本植えた。スカルド農場の苗木と村の木の枝から切った挿し木の両方を試みた。

しかし、この年の活着率は二〇パーセントと不調であった。その理由は、植林時期が遅すぎたためである。ブロードピーク登山隊の別動隊として一般募集で編成した植林隊は、登山隊と一緒に五月十五日に日本を出発して、五月下旬に植樹した。標高二五〇〇メートルのスカルドの農場で、苗木はすでに大きく葉を広げていた。カンカン照りの中で苗を起し、二メートルにも伸びた苗木を短く切りもせずにジープに満載し、丸一日かけて村へ運ぶ、その道中で苗木はどんどん萎れていった。



根元を削り取られたビャクシンの樹

翌年からは四月に植樹したので、活着率は八〇パーセントに上がった。さらに九六年からは日本の学生の春休みに合わせて、三月下旬に出かけて植えている。ポプラとヤナギは新芽を吹く前だから勢いがよく、活着率は九〇パーセントを超えてきた。

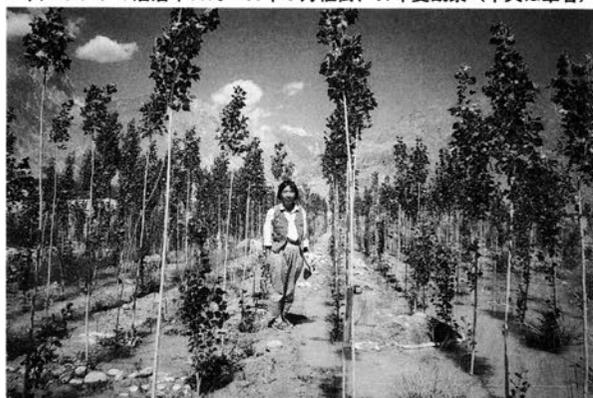
#### ■水と柵

ヒマラヤ山脈は西へ行くほどモンソンの影響が少なく乾燥している。インド洋からの湿った大気は、カラム最南端の八千メートル峰ナンガパルバットで水滴を落としてしまっている。その北側の谷間は乾燥している。中国西部の広大なタクラマカン砂漠の南縁にカラコルム山脈が位置しているのである。

このような乾燥地では樹木は育ちにくい。カラコルムは赤褐色の地肌をむき出しにした荒々しい岩山、深



上/ハイダラバードに植林地を拓く 96年4月  
下/ポプラの活着率95% 96年8月植樹、97年夏観察(中央は筆者)



く切れ込んだ谷間をほとぼしる濁流と、厳しいモノトーンの風景である。しかし、初夏は雪融けの水流に沿ってヤナギとポプラの緑が芽吹き、村では麦とソバとアズキが彩りを添える。谷川の水は村の裏山の斜面を横断して導いた灌漑水路に入り、畑に引かれている。

植林地の選定には、水路の確保が一番である。水は谷川から引く場合と泉から引く場合があるが、トンガル村の砂漠はその両方が利用できる好適地である。

また、家畜とともに暮らす村の植林地には食害防止柵が欠かせない。当初は現地式に石垣で囲い、上にイ

バラを置いたが、家畜は高さ一メートルではイバラを前脚で落として侵入してしまつた。高さ一・五メートルにすれば完璧だが、時間と費用がかかる。次に有刺鉄線を横に数段張つてみたが、間隔が広いと入ってくる。昨年「緑の募金」の助成金をいただけようになつたので、

一・五メートルの金網フェンスで囲うことができ、やっと完璧になつた。

そのフェンスの支柱には、現地スタッフの提案で、村に残るヤナギの太い枝を切つて使つてみた。枝といえ直径一〇センチもの太い枝を切るには抵抗があつたが、夏にトンガル村に行つてみて驚いた。その太い

枝の支柱から新しい枝が六〇センチ以上も伸びているではないか。挿し木のように根を出したのだ。それともトンガル村の村長が植林地をしっかりと管理して、フェンスの下に溝を掘つて常に水を流してくれたのである。支柱と並木がいつべんにできた。五年目にしてやっとよい方法が見つかった。

### ■村民の理解と協力

私たちの植林地は、春に植林、夏は観察と管理指導に、わずか一カ月弱の日程で現地に出かけるだけである。それ以外の長い期間、植林地を管理し、樹を育てるべき村人が、樹木の大切さを十分理解していることが根本的に必要なのだが、これがなかなか難しい。

九三年からずっと付き合ってきたアスコレ村が未だに問題である。村長に勧められて、二年目も彼の所有する河原に近い畑を借りてポプラを植えた。作業が終わつた頃一人の少年が現れ、「ここは僕の家の土地だよ、村長さんのじゃない」と言う。二年後、立派に育つたポプラはメチャクチャに荒らされていた。村長反対派の数人が家畜を入れたり、切つたり、水を止めたりしたようだ。村長は脳卒中で一昨年秋亡くなつて、新しいリーダーができたが、未だに

二派對立が続いているようだ。人の所有地はもうこりこりだ。トンガル村、ハイダラバード村では、村の共有地を村民合意の上で利用することにした。

ハイダラバードに拓いた果樹園には、日本とパキスタン両国のリンゴ、アズキの苗木八百本、ポプラ七百本を植えた。管理は村民による共同管理で、輪番制で水管理をするよう要求しているのだが、これがどうも理解されていない。

トンガル村が唯一、もっともよく管理されているようだ。村長が「オレに任せてくれ」と大変熱心である。一つでもモデルケースが生まれるとホツとする。他の村への刺激効果が期待できるからである。

### ■青空教室から小学校校舎建設

乾燥地域では、木は植えただけでは育たない。愛情を持って育てる人間が必要である。村人がどんな暮らしをしているのか、どんな問題を抱えているのかを知ることから始めないと、私たちの援助は空回りしてしまふかもしれない。そう考へて、四年からファミリー調査を続けてきた。家族構成、人口動態、婚姻関係、畑作、家畜等の資産、教育、健康、女性の生活等々。

その結果、もっとも驚いたのは九

# 今年もさくらで会いましょう

三年当時、ブラルド川流域に通年きちんと教師が定着している小学校が一つもなかったことである。下流の町シガールから派遣された教師が村に短期間滞在するだけの小学校が、十五村中二村にあっただけである。

植えた木を育ててもらうためにも、極度に低い保健衛生環境を改善するためにも、根本になる教育支援が必要だと、隊に参加した誰もが認識して、九四年から青空教室を開校した。村に定着してくれるようにと、町に出て十年以上教育を受けた村出身の若者を探して雇用し、昨年までに四校開いた。

天気の悪い日は暗くて狭い民家の一室で勉強している子供たちに、一年でも早く校舎をプレゼントしたいと焦っているとき、往年の名クライマー、松本龍雄さんから「校舎を建ててください」と多額の寄付の申し出を受けた。それは、松本さんから東京都交通局労働組合の有志が、昔、都電撤去反対運動をしてクビになりかけたとき、組合仲間が集めた団結基金だったそうだ。仲間の皆さんも同意してくださり、寄付していただいた。これを自己資金として外務省

民間援助金を申請し、二倍の金額になったので、昨年は一度に三校を竣工することができた。

ただ、校舎を建てるにあたって、女生徒を入学させることを条件としたのだが、残念ながら実現したのは一校だけであった。女性の地位の低さ、水汲み、燃料となる草の根掘り、農作業、毎年一回のような多産など、過酷な生活の改善のためにも、教育の場が必要である。

それでも小学校が開校して、植林教育もしやすくなった。手作りの絵本や紙芝居による指導、挿し木作り、植栽、水やりなど、教師の号令で生徒は効率よく動いてくれる。

## ■医療、保健衛生指導

黒石恒医師の参加により、歯科医師、看護婦、医大生、看護学校生を募集して、医療と保健衛生指導班を九六年から派遣できるようになった。海から遠い山村には、ヨード欠乏による甲状腺腫、クレチン症が異常に多い。調査が進むほどに罹患者数が増え、実に七〇パーセントを超えてきた。これは妊娠中の胎児に影響を及ぼし、知恵遅れ、発育不良、小

人症が生まれるという深刻な病気である。ヨード剤治療とヨード添加食塩摂取の普及に、私たちも力を入れることにした。

## ■JAC東海支部K2隊の植林

登山隊やトレッキング隊こそ植樹をしてほしいのに、六月〜八月の登山シーズンと植林好適期が合わないのを残念に思っていた。しかし、昨年の東海支部K2隊の故徳島前隊長の「登山隊も木を植えたい」との申し出がとても嬉しくて、何かよい方法はないかと考えていた。昨年試みに、四月の植林隊がパイユでヤナギの挿し木苗を切り、水槽に浸しておき、六月に入山した田辺隊長らが、水の中で白い根が伸び出した挿し木苗を注意深く土の中に埋める、という方法で植えてもらった。八月の観察では約半数は生きていたようだった。

この方法でパイユを通る登山隊員が一人数本ずつでも植えてくれれば、そのうちに美しい森が生まれるかもしれない。

この会の顧問になっていたいでいる齋藤惇生会長にバルトロ街道の植林計画を話したとき「大地と相撲を取るつもりかい」と言われたが、カラコルム高地の植林には、まことに言い得て妙な表現だと思う。相撲

を取りに現地へきてくださるJAC会員の土俵入りを期待している。

今春の国際ボランティア隊は、春休みの学生中心の隊に五十三名、四月の一般中高年隊に三十名が出かけることになっている。折しも、雪山を背にした山村はアンズの花で埋まる頃、いい汗を流してこよう。

## 「カンチエンジュンガ登山隊一九九八」盛大に壮行会を開催

日本山岳会青年部カンチエンジュンガ登山隊の壮行会が二月二十八日、東京農業大学のグリーンアカデミーホールで開かれた。登山の世界だけでなく、多方面の関係者が大勢集い、盛会であった。

今回のカンチエンジュンガ登山は、バリエーションルートの北面より高所ポーターを使用せず登頂を目指す計画である。先発隊は三月八日、本隊は三月十五日に出発し、五月中旬の登頂を予定している。

齋藤惇生会長が挨拶に立ち「会員の年齢が年々高くなる日本山岳会の中で、このような若いメンバーの登山隊が組織されることは、今後日本山岳会だけでなく、日本の登山の発展においても非常に有意義である」



挨拶する谷川太郎隊長と隊員たち

と平均年齢二十九歳の登山隊への期待を述べた。

谷川太郎隊長は「私たちの求める登山の本質が未知や困難への挑戦であるならば、自分たちの足を冷静に見定めつつも、次の新たな一歩を踏み出す必要がある」と七つの大学から集まった若い隊員の活躍と、この登山以降の各自の登山への取り組みに期待し、カンチェンジュンガ登山への決意を語ると、参加者の期待はさらに高まり、会場は盛大な拍手に包まれた。

この登山隊には九五年のマカール登山隊の隊員、九六年のK2登山隊の隊員、そして昨九七年のダウラギ

リ登山隊の隊員が多く含まれており、日本山岳会による継続した海外登山の中で、確実に若いメンバーが育ってきていることを象徴している。

閉会に当たり、宇田川芳伸青年部担当理事が「登山隊が日本を出発すると、全員無事に帰ってくるまで眠れぬ夜が続くが、このような熱意ある登山隊を送り出すことは、日本山岳会にとって必ずや糧となると思う。皆様のご支援・ご協力に感謝を申し上げます」と謝辞を述べた。(青年部)

### 全国支部事務局 担当者会議

二月二十一、二十二の両日、水道橋グリーンホテルにおいて、平成十年支部事務局担当者会議が開催された。昨年十一月創立の広島支部の初参加を得て、全二十四支部が一堂に会した。開会に先立って、来日中の中国登山協会曾曠生会長の挨拶があり、会議も国際化の時代を感じさせた。

初日の二十一日は、織内名誉会員による「JACの理想を語る」というテーマで本会の伝統についての意義深い講演と、神崎監事による「二十一世紀のJACを語る」を主題として国際関係の中での本会の役割な

ど、参加者には有意義な話の後、全員によるディスカッションで大いに意見を交換した。

翌二十二日は場所を本会ルームに移し、各支部より質問、提案、意見などが出され、実りある二日間の会議を終了した。

総務委員会の準備した資料は、会務の実務全般にわたるだけではなく、本会の国内外での役割までも網羅した詳細なもので、参加者より好評を得た。

(絹川祥夫)

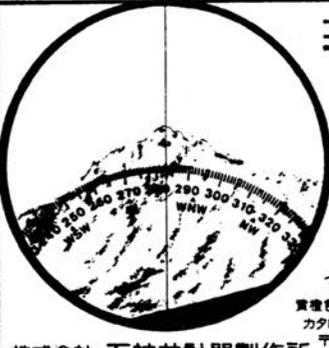
**参加者** 北海道(高澤光雄)、青森(中村勉)、岩手(松田和弘)、秋田(佐々木民秀・土肥貞之)、山形(真田三)、宮城(千石信夫)、福島(安藤治、越後(田邊信行)、信濃(塚原賢勝・垣内雄治)、山梨(小宮山稔)、静岡(水野公男)、東海(中世古隆司)、岐阜(堀義博・高木泰夫)、京都(杉山イタル・須藤建志)、富山(高柳清美)、石川(樽矢導章)、福井(船田洋子)、関西(川戸昭三)、山陰(中井俊一・吉川明秀)、福岡(副島勝人)、東九州(西孝子)、熊本(田上敏行)、宮崎(大谷優)、広島(吉村千春・平位剛)、小倉、大森副会長、絹川総務理事、吉永財務理事、伊丹常務理事、村井理事、中村、穴田各常任評議員、総務委員会(岩瀬、南川、中川、中村、嶋原、湯口、高原、永田、藤田、藤井)

### 今西邦夫氏、ネパール王国 大阪名誉総領事に就任

こよなく山を愛し、ネパール王国を愛した今西壽雄元会長は、登山を通じてネパール王国と深い絆を結び、平成五年四月に大阪名誉総領事に就任、大阪名誉総領事館を開設して五年が経過しました。その遺志を継ぎ、ご子息の今西組社長・今西邦夫氏がこのたびネパール王国大阪名誉総領事に就任されました。両国の友好親善関係をさらに深め、ネパール王国発展のためにご尽力いただくことになりました。

**コンパスグラス HB-3**

広視野10°の明るい視野に目盛が重なって見えます。見た目様がそのまま正しい磁気方位です。




重量78g.  
つや消し黒 ￥17,000 送料 ￥600  
買増色メタリック ￥18,000 消費税別  
カタログ代無料、電話、FAX、葉書でどうぞ  
〒177 東京都東區上石神井1丁目37番13号  
株式会社 石神井計器製作所 TEL 03-3928-5411 FAX 03-3928-5411

# カンチェンジュンガへの道

日本山岳会青年部カンチェンジュンガ登山隊一九九八

隊長・谷川太郎／山本茂久



8586mのカンチェンジュンガ主峰 撮影・東京農大ツウインズ登山隊

日本山岳会青年部では、九六年のK2、九七年のダウラギリとヒマラヤの八千メートル峰登山を實施してきました。K2は十二名登頂という大きな成果をあげることができましたが、ダウラギリは大量の降雪に災いされ、七五〇メートルを最高到達点として終了しました。

そして九八年、さらなる前進を目指して世界第三位の高峰カンチェンジュンガ登山を計画しました。登山の趣旨は前号で述べましたが、日程、ルートなど具体的な登山計画をご紹介しますと思います。

三月八日、すでに先発隊が成田から出発いたしました。十五日、筆者も本隊の一員として出発、少々慌ただしい思いでこの原稿を書いています。

## ■計画概要

登山隊名 日本山岳会青年部カン

チェンジュンガ登山隊一九九八

目的 カンチェンジュンガ主峰の

北面からの登頂

主催 社団法人日本山岳会青年部

隊の構成とメンバー

隊長・谷川 太郎 (30)

副隊長・赤坂 謙三 (29)

隊員・田辺 治 (37)

奥田 仁一 (31)  
山本 茂久 (29)  
長久保浩司 (28)  
広瀬 健太 (28)  
椎名 厚史 (27)  
大橋 隆平 (24)  
中村 和貞 (24)  
リエゾンオフィサー、コック、  
キッチンボーイ、メールランナ  
ー各一名

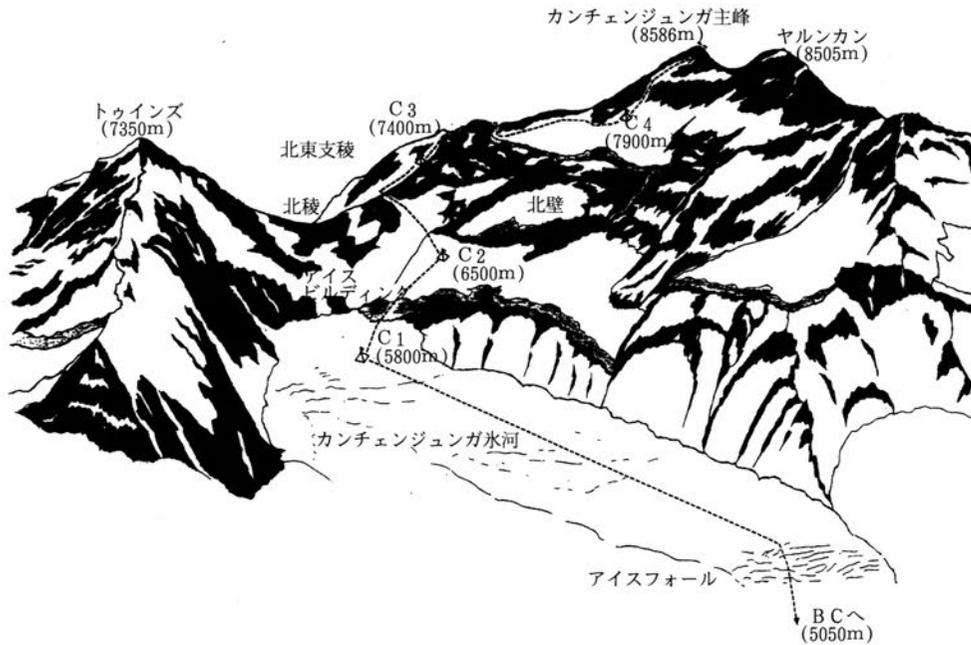
## 日程

三月八日 先発隊日本出発 カト  
マンズ入り  
十五日 本隊出発 カトマンズ  
二十日 グンザ(三五五〇m)  
二十三日 キャラバン、順応活動  
二十八日 BC(五〇五〇m)着  
三十一日 登山開始  
四月 登山活動約六十日間  
五月中旬 登頂予定  
三十一日 ベースキャンプ撤収  
六月下旬 帰国

## ■ルートについて

北面のカンチェンジュンガ氷河末端のバンペマにBC(五〇五〇メートル)を置き、氷河の上端、懸垂氷河の末端部分にC1(五八〇〇メートル)を設営します。この部分は距離が長くアイスフォールもあるため、多量の物資の荷揚

## カンチェンジュンガ北面ルート概念図



げを行うのは難しいのですが、しよっぱなでもあり、当然やらなければなりません。第一のポイントといえます。C1からはアイスビルディングと呼ばれる懸垂氷河の末端部分を

越えて、第一雪田上のC2(六五〇〇メートル)へ到達します。アイスビルディングは高さ二〇〇メートルの氷雪壁で、技術的にはもっとも難しい部分だと思われる。この部分のルートの確保と整備が、荷揚げを大きく左右します。第二のポイントです。C2からは北稜を目指します。この斜面は常に日陰になっているため、氷が極端に硬い場合があり、岩稜部分にルートを取るようになります。北稜に出たからは、稜線の東面をたどり七三〇〇〜七四〇〇メートルにC3を設営する予定です。この部分は資料が乏しく、幕営地は実際に行ってみないと分からない状態ですが、C4の位置が決まっていることから、この高度に設ける必要があります。C3からも北稜をたどり、ツッカーヒュトルと呼ばれる小ピークの先から再び北面側に出ます。北壁の第三雪田上部、一九八〇年山学同志会隊と同じ位置にC4(七九〇〇メートル)を設営します。頂上アタックは、雪面をつないで直上し、西峰(ヤルンカン)を結ぶ西稜のコルに出ます。コルからはヤルン氷河側に回り込み、初登ルートをたどって頂上に到達し

ます。この部分は技術的に難しく、高所であることから第三のポイントです。

### ■ シェルパレス・無酸素で行動

今回は、ヒマラヤの高峰を日本で合宿するような雰囲気です。という考えから、シェルパ(ハイポーター)レスというスタイルにしました。しかし、自分たちだけで荷揚げを行うと荷揚げ重量が限られてくるため、酸素ボンベは最小限しか上げることができません。酸素もなくすることができません。酸素もなくすることができません。山学同志会隊が頂上アタックに十五〜十九時間かかっていることを考えると、安全かつ効率よく酸素を使用するためには、アタック前日の睡眠用に酸素が必要だと考えました。

今回は、当初から個人の責任に基づいた大人の隊にしたい、ということを経営員全員で確認してききました。そして全員登頂ということを考えて、当たり前のことですが、いかに荷揚げをスムーズに行えるかが本日のポイントであると思っています。

JAC会員の皆さまの温かいご声援とご協力に心より感謝しつつ、三月十二日日本隊出発を前にして。

# 報告

REPORT  
4月

## 総務委員会

### 年次晩餐会特別企画展 「わが支部とこのおきの山」

平成九年度年次晩餐会会場に隣接した「慶雲の間」で行われた本展は、各支部の魅力ある山の情報を会員に紹介していただくことにより、支部相互の理解を深めるとともに、会員の交流促進がさらに活発になることを願って企画したものでした。

十一月に新設された広島支部を含め全支部の参加を得て成功裡に終わりました。ひとえに各支部長をはじめ、支部会員各位の絶大なご尽力によるものと、改めてお礼申し上げます。

本展で展示された山の詳細は順次会報に掲載しますが、当日出席できなかった会員のために、山名および展示概要を紹介します。

日本山岳会の各委員会  
同好会の活動報告です。

#### 一、各支部推薦の山名

大雪山(北海道) 戸来岳(青森) 岩手山(岩手) 丁岳(秋田) 加無山(山形) オボコンベ(宮城) ニツ筋山(福島) 蒜場山(越後) 金松寺山 天狗岩(信濃) 黒富士(山梨) 黒法師岳(静岡) 三ノ瀬明神(東海) 笠ヶ岳(岐阜) 芦生の森(京都) 金剛堂山(富山) 白山加賀禅定道(石川) 平家岳(福井) ロックガーデントレイル(関西) 苅尾山(広島) 烏ガ山(山陰) 対馬童良山・白山・御山(福岡) 硫黄岳(東九州) 仰烏帽子山(熊本) 大崩山・湧塚岩峰(宮崎) 二、展示方法(一支部四枚のパネルで構成)  
①山の写真 ②推薦理由 ③概念図・コースタイム ④五万図・二万五千図 ⑤交通手段 ⑥地元で出版されている山岳図書の紹介、販売。  
当日は各支部から説明要員として一名が常駐しました。

一堂に展示された各支部の山は、いずれ劣らぬ「とっておきの山」と拝察しました。当然のことながら、全山に登った会員はいなかったようです。多い人でも六山、少ない人で二山といったところでした。あわせて各支部の皆さんから苦労話を伺いました。この一山を選定するにあたり、支部の中で世代を超えた検討が行われたということでした。晩餐会当日も、参加会員が熱心に情報収集している姿が随所で見られました。一堂に集めた各支部の興味深い情報を見て「大変刺激を受けた。支部に戻ったら早速来年に向けて選定作業に入るので、ぜひまた実施してほしい」との要望が多数の役員、会員から寄せられたことがとても印象的でした。(中村 昭)

## 資料委員会

### 幻のピッケル

このたび、日本高周波鋼業株式会社(千代田区大手町)より日本山岳会に、一本のピッケルをご寄贈いただきました。

同社の特殊鋼は、戦時中ゼロ式戦闘機の脚部に使用されていました。戦後の民需転換により、カミソリ、鎌などを生産する中で、ピッケルも

その一環として、同社富山製作所において試作が行われ、KOUSYUHA・TOYAMAという刻印のあるピッケル数十本が製作されました。後に岳人の間で、その品質のよさ、数の希少さ、市場に出回らなかつたがゆえに「幻のピッケル」といわれて絶賛されたものです。そのピッケルが、同社富山製作所創立六十周年の記念企画として、三本、当初と全く同じ特殊鋼材を用いて完全に複製されました。そのうちの一本が日本山岳会に贈られたのです。

全長八七〇ミリ、頭部の長さ三三〇ミリ、シャフトにはヒッコリー材を使用し、優美、豪快、バランスのとれた大型ピッケルです。  
ルーム一〇四号室のピッケルケースに説明書とともに展示してあります。ぜひご覧ください。(鯉坂青青)

## 科学研究委員会・シンボジウム

### 山で役立つ天気の見方

昨年十一月二十九日、明治大学駿河台校舎にて、四人の講師をお招きし、気象に関するシンポジウムを開催した。

一、山の気象と天気図の見方(日本気象協会 奥山巖会員)

天気は上層の天気図が基本であり、

これを推測、補うものとして地上天気図、気象衛星の雲画像などがある。地上天気図においては、風の強さ、方向、気温の減率、大気の安定度などから雲の生成を推察する。雨や雪を生む悪天は、雲の付近に上昇気流があるか否かで決まる。

気圧配置は、低気圧中心から南西方向に寒冷前線、南東に温暖前線が生じ、前線面付近に積乱雲を生じるときは注意を要する。

悪天の前兆には前線の接近などが関係するが、最近では定性的なパターンが現れなくなった。一般に半日ぐらい前から巻雲→巻層雲→高層雲→と変化して乱層雲となり雨が降り出すといわれているが、寒冷前線があると急に雲が現れ、積乱雲となって雨や雷雨をもたらす。風上(西)の方向の雲に注意することが必要。また朝、空気が澄んでいるときは雷に注意を要する。

〔観天望気〕上層の雲が帯状になっている場合、翌日雨になる。自分のいる南側の山に笠雲がかかった場合も悪天の前兆。

二、気象衛星雲画像の見方と利用法  
(日本気象協会 黒田雄紀氏)

ひまわりは二十年前から天気図とともにメディアに示されている。地上天気図ではわからない上層の天気とくに積乱雲がわかる。積乱雲は危

## 海外の山

### エル・キャピタン 初見一撃

#### 江本嘉伸

ヒップホップ・ダンス。一九八〇年代、ニューヨークの街角で黒人青年たちがはやらせた、リズム感にあふれた踊りのこと。日本でも代々木公園なんかで見かけた。

恵比寿でそのヒップホップとジャズ・ダンスを教えている台湾生まれの李姿慧のスタジオに「ユージ」が現れたのは、三年前だった。

週一回の厳しいレッスンはじまった。二時間通して稽古すると立つのもイヤになるほどの激しさだ。

フィギュア・スケートの選手だった姿慧にとって、はじめ若者は熱心な生徒のひとりではなかったが、その率直さ、一途さ、考え方の柔軟さに次第にひかれてゆく。

気がついたら仲良しカップルになっていて、身重の身でヨセミテにいた。九七年九月のことである。

ヨセミテ国立公園にある千メートルの垂直の岩壁、エル・キャピタンの正面壁を「サラテ・ルート」と呼

ぶ。平山ユージ(二十八歳)はここを「オンサイト」で登りきろうとしていた。オンサイト「初見一撃」の言葉通り、試登なしにいきなり登攀することだ。

サラテがはじめてフリーで登られたのは、一九八八年アメリカのトッド・スキナー、ポール・ピアナによってだった。当時スキナーたちは半年をかけて試登し、長年の懸案をなすとげた。以後九五年、九六年にオーストリアの兄弟クライマーがフリーで登っているが、どちらも一カ月の長い時間をかけての登攀だった。それを今回、平山はいきなり取りつこうというのだ。

決意してから二年がたっていた。その間いっさい「サラテ」にはさわれない。十分にトレーニングを積んでの挑戦だったが、それでも緊張は大きかった。一生に一度だけしかできない試みなのだ。

九月十八日、日の出とともにスタート。平山の大いなる挑戦のサポート役として、地元ハンズ・フロリン、日本の鈴木英貴の二人のベテランがビレーと荷揚げを担当した。

「最初の五〇メートルは、ほんとに緊張しましたね。落ちたら終わり、とそれだけ考えて」と、本人は振り返る。

基部まですとん、と切れ落ちた巨大な花崗岩の壁を天性のバランスと持久力でこなし、普通の二日分(二〇ピッチ)を登りきり、さらに上部をめざしたところで痛恨の墜落。この瞬間「全ルートのオンサイト」の大記録は消えた。しかし、テラスでのビバーク後、翌日空中に突き出た「ヘッドウォール」を二回の墜落で越え、ついに世界初のこの壁の「初見一撃」でのフリー完登をなすとげた。

あたためていた夢を実現し、今年二月八日、生後三カ月の長男勇太とともにめでたく結婚式をあげた二人にもうひとつ朗報が待っていた。

三月二十七日、九七年度オベル冒險大賞(副賞、百万円)に選ばれたのだ。十五歳でクライミングを始め、ワールドカップに二度優勝、百回以上の国際コンペに出場して世界中で「ユージ」と親しまれている平山だが、日本では十分評価を受けているとは言えない。

「社会が認めてくれたことが何よりも嬉しい」と英、仏語に堪能で、合気道、ヨガ、ヒップホップと新しいことへの挑戦を好むピアスをした若者は言った。

本名裕示。「プロフェッションナル・クライマー」の名刺を持つ、スケールの大きな青年の活躍が続く。

## 次代に残そう美しい山と溪

険な雲であり、悪天をもたらす。雲画像から積乱雲を見つけないこと、日本海低気圧に注意することが重要なポイント。

ひまわりは地上三万五八〇〇キロメートルを一分間一〇〇回転している。赤外画像、可視画像、水蒸気画像の三種類あるが、一般に見られるのは赤外画像で、雲のような温度の低いところが白く、海は黒く見える。低い雲は灰色になる。可視画像は地球を見たまま映し、雲の分布はわかるが高さはわからない。水蒸気画像は大気の流れを識別する。

積乱雲は段階状か扇状になるが、画像では白く見える。発達するとコンマのような形になるためコンマ形雲ともいう。雷、突風、竜巻を起こし低気圧の寒冷前線の近くにできやすい。西側のへり、しばしば付近で雷突風が起こる。南海上から入ってくる場合など、天気図に現れない積乱雲がしょっちゅうある。

三つの低気圧（日本海、南岸、二つ玉）のうち、嵐をもたらすのは日本海低気圧である。南からの湿った空気で風や雨をもたらす。関東平野は南や東からの湿った空気に弱いと

いえる。山に行くときは天気図と雲画像を見て雲の動きをつかんでおくことが必要。とくに日本海側、西側の白い雲（とくに積乱雲）に注意。

三、気象に起因する山岳の危険な現象（小岩清水会員）

雪崩は積雪期において避け得ない現象であるが、経験や知識によってある程度危険を回避している。雪があるなしに関わらず、遭遇する可能性があるのが雪代雪崩（スラッシュ）で、大変危険なものである。

〔谷川岳の例〕雪のない時期に起きていた。凍結層が形成されなくても岩質が不透水層と同じ役割を果たしている。日本海に強烈な低気圧が入った場合、上に積もった雪が短時間の雨で湿潤化して液状（スノージヤム/シャーベット状）となり、砂を巻き込みながら流れ下った。液状雪崩で雪がからみ、土砂が混じっている。

〔富士山の例〕水を通さない層に雪が積もり、雨が降ると雪を解かしながら斜面を下る。日本海の低気圧など気象変化により起こりやすいといえる。幅三五〇メートルにおよぶ巨大な雪代が記録されており、登山

の重要なルートにもいくつかの雪代雪崩が起きている。一般の観光道路付近でも雪代の記録があるので、いつも注意が必要。雪がないのに雪崩が起こることを認識する必要がある。通常の雪崩に比して雪代は巨大なデブリでまず助かることはない。

谷川岳、富士山以外で、木曾駒、宝剣カール、岩木山、秋田駒、鳥海山、利尻山など火山砂礫、岩盤性の山の多くに起きている。

四、北アルプスの雪・近年の変動から（飯田肇会員）

一九八五年から九六年にかけて冬期積雪量の観測を実施。地球温暖化による現象が北ア、立山周辺でも起きている。データから積雪の年々の変動が激しいことがわかる。とくに市内に比べると山岳地では必ずしも同じ傾向になっていない。

冬山で雨になることが多くなる傾向があり、冬型の気圧配置が長く続かず、低気圧がよく入ってくる。高い山では、低気圧で降る雪と冬型配置の降雪の合計になるが、比率が変わってきている。冬型と低気圧型での降水の違いがはっきり見られる。

とくに北アルプスでは冬でも低気圧がよく入ってくる。大きな原因。低気圧型と冬型で雪の降る量が異なり、冬型の雪は高いところほど積雪が多い。低気圧型は低いところ

でも積雪が多い。

また雪の中身も変化している。最近の雪はザラメ層の多い低気圧型で、雨も混ざっている。温度も地面では零度近く、雪の温度が比較的高い。したがって雪崩発生も多くなる。例えば一昨年、劔岳での大きな雪崩の原因はシモザラメ雪であった。雪の中に水の層があると温度勾配が生じシモザラメ層になりやすい。この状態で次の雪が積もると雪崩になりやすい。

霧も雪崩を起こしやすく、雪泥流（スラッシュ）が黒部溪谷などに多く発生している。いずれも雪の中の温度が高くなっていることによる。

参加者約八十名。当日の予稿集があります。（近藤善則）

### 図書委員会

#### 山岳図書を語る夕べ 「山岳写真のなぞ解き」

日本山岳会では明治から大正にかけて、写真集「高山深谷」全八集を発行した。高野鷹蔵の手による本集は、この時代の写真そのものと、山岳写真を語るものとして極めて貴重である。

イタリア国立トリノ山岳博物館（トリノ市）では、明治四十年代か



写真を手に解説する杉本誠会員

ら現代までの日本の山岳写真展を本年五月十五日から六月二十八日まで開催する。その準備にたずさわった杉本誠会員に、原板探しから写真解説に至るまでの苦勞を、出品作品と「高山深谷」など関連図書を見ながら語っていただいた。

\*

写真展は優れた写真と適切な解説とが一体となって、初めて見る人々に感動を与える。しかし歴史的な写真になると古いものほど、いっどこで誰が何を撮ったのか不明となり、解説のための調査が至難となる。調査にあたっては、誰が写したか、原板はどこにあるか、写真解説

をどうつけるか、という三点が欠かせない。

写真そのものの裏側に明記されている内容でも、鵜呑みにできないものもある。英国アルパインジャーナルに初めて日本アルプスが紹介されたときの写真と同じプリントに撮影者本人のメモがあったのだが、原本と照合すると、掲載時期にずれがあり驚いたものである。

また被写体の人物を調べるのも楽ではないが、その時代の関係図書を幅広く当たると、思わぬところに手がかりがあるものだ。写真そのものに標識や関係文字が写っていたれば、まず信用していいだろう。

関東大震災や太平洋戦争で、すべてが消失してしまったと思われる写真も、遺族や関係者、博物館などの協力を得て、探し出すことが可能であきらめることはない。

山名が異なっていたり、裏焼きプリントであったりして、観る方々から指摘を受けることが稀にあるが、こうした指摘は大切な情報として常に感謝している。

杉本誠会員は、雑誌「岳人」の元編集長で、そのころに始めた日本山岳写真史研究を三十余年後の今も続けていく。

なお同展は日伊同時開催であり、日本国内展は豊田市美術館（六月二

日）同十四日）、長野県豊科町・田淵行男記念館（七月十一日〜八月三十日）の二館で開かれる。

本集会は二月十七日十九時よりJACCルームで開催、参加者二十八名。  
(林 栄二)

### データバンク研究会

### インターネットホームページへの接続方法

日本山岳会ではインターネットのホームページを開設しました。インターネットを楽しむためには、①端末の用意 ②電話網への接続 ③ネットワークサービスプロバイダーとの接続などが必要です。皆さんの自宅から電話線を通してインターネットへ接続する仕方をお知らせします。

図が全体の接続イメージです。電話網を介してインターネット網に接続され、世界中と情報通信ができます。

■端末（パソコン）  
ウインドウズまたはマックのパソコンを使うのが一般的です。ブラウザと呼ばれるインターネットを利用するための通信用ソフトウェアとしてはNetscape Navigator, Internet Explorerなどがあります。

#### ■電話線への接続

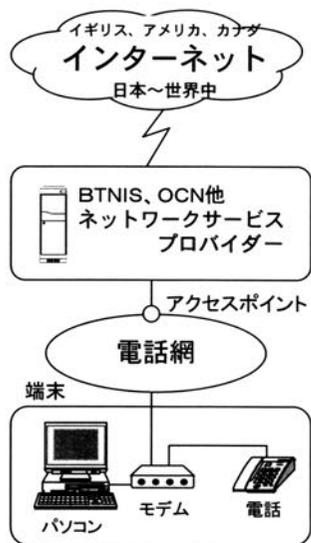
パソコンを電話線に接続するためにはモデムが必要です。モデムはパソコンに内蔵されている場合もありますし、独立したモデムを外付けにする場合もあります。電話機のコネクタが「モジュラージャック」になっているれば、モデムを接続するときも、特別の届けなどは不要です。モデムは28.8kbps以上の機種が望まれます。

#### プロバイダーとの契約

#### 電話の契約

#### ■インターネットサービスを提供する事業者（プロバイダー）と契約して、インターネット網に接続してもらいます。日本には二千社以上のプロバイダーがあります。プロ

### 接続イメージ図



■インターネットサービスを提供する事業者（プロバイダー）と契約して、インターネット網に接続してもらいます。日本には二千社以上のプロバイダーがあります。プロ

バイダー選びには次のような点を考慮します。

(1) 接続料金が安いこと。従量制と定額制、その中間ともいえる一定時間までは定額、それを越えると従量制といった料金など、事業者によってそれぞれ魅力ある料金体系を用意しています。高い、安いはありませんが、大まかにいうと、月当たり二十時間まで二千円、二十時間以降は一分間十円程度の費用がかかるものが多いようです。(別に契約一時金が三千円程度)

(2) インターネット網に接続する点をアクセスポイントと呼び、インターネットを利用する自宅などの近くのプロバイダーが用意した電話番号へ接続します。同一市内ならば、電話料金が安くすみます。隣町とかもっと遠いところまでつなぐようだと電話料金がかさみます。アクセスポイントは事業者ごとに違いますので、インターネットを使う場所の近くにアクセスポイントがあるプロバイダーを選ぶことです。

(3) 混まない事業者を選ぶことも大切です。接続回数が少ない場合、バックボーンが細かい場合などは、夜間など利用者が多くなると、回線が混んで接続しにくくなったり、動作速度が遅くなったりすることがあります。回線数などは公表されませんが

で、友人などの利用者に直接聞いたりにして情報を集めます。

\*要望、質問などは電子メールまたはルーム気付でご連絡ください。  
jac-info@mx5.nisiq.net  
(森山善弘)

### 三水会

#### 第三百七十回現地集會 越生梅林／高山不動へ

二月七日、八日の集會は竹寺の予定であったが、竹寺の屋根葺き替えのため延期し、変更した。



梅には少し早かったが、野外料理で楽しむ 撮影／高田眞哉

七日、池袋駅発九時四十三分の東上線急行に乗り、坂戸で乗り換えて越生駅へ。タクシーに分乗して梅林に行く。早咲きの梅の探訪を目的にしていたが、シーズンに少し早く、紅梅、白梅とも開花がチラホラで、来週からの開園を準備中であった。

本日の最大の楽しみは鴨鍋の昼食会である。越辺川の岸辺、紅梅の傍らに陣取って、鍋二台に白菜、葱、しらたき、焼き豆腐、鴨肉を惜し気なく投げ入れ、総勢十六名で取り囲み、煮えたところで持参の銘酒を回し、飲み、かつ食べ始める。

野外の食事はいつでもおいしいが、今日は特別に美味であった。仕上げにうどんを入れてできあがりである。このうまさは忘れられなくなりそう。

きれいに跡を片付けて、午後二時三十分、黒山鉱泉からの迎車に乗って宿へ行く。宿は改築したばかりとみえ、すべて新しい。お湯は透明で二十四時間入浴できる。夕食は午後六時で、宴会となったが、昼食の印象が残り、山里の定番料理では活気が出なかった。

八日、早朝、起床して外を見ると、新雪がうっすらと積もっている。昨日は晴天だったのに、今日はどんよりと曇っている。今冬の天気は変わりのやすいのか。

宿をのんびりと九時三十分に出発。奥武蔵の稜線を目指して歩く。滝を左に見てから、右手の指道標で山道に入る。頭上から融けた雪が滴となって降ってくる。登山道が続くのかと思っていると、五分ほどで車道に出た。旧雪が残っていて、登って行くほどに多くなってくる。しばらく行って、道が右へ大きくカーブする左に指道標があり、沢沿いの山道に入る。雪がけっこう残っていて、新年山行同様、雪上登山となる。

十一時二十五分、グリーンラインの傘杉峠の辺りに出ると、車の轍がくっきりと残っている。雪道をわざわざ走りぬける族がいるようだ。雪をけ散らしながら花立松峠を過ぎ、高山不動の上、関八州見晴し台への分岐点広場に十二時頃到着。気温が下がり寒い。手頃な東屋があったので、鍋を出して朝食の残りなどおりつけたの食糧を入れ、チンロなども注いでヤミ鍋をこしらえる。これも好評でうまかった。

昼食の話は、藤野町で開かれた自然保護シンポジウムに参加したのに、「山」一月号では三水会の名がなかったということであった。

後始末をして、午後一時三十五分に高山不動に参詣し、雪道を下って西吾野駅へ出た。参加者・三水会十三名、E W K四名。(石田稔郎)

## 東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、一点につき二〇〇字詰原稿用紙五〜六枚をお願いします)



イラスト 野田四郎

### 二本の「山内」のピッケル

山本健一郎

長年の間にいろいろな山の道具が手元を集まったが、同じ番号の「仙台・山内東一郎作」のピッケルが二本あるのは珍しいので紹介しよう。昭和二十五年の正月、高島屋の裏昭和通りを渡ったところにあった好日山荘までお年玉でザイルを買に行った仲間が、登山用品のカタログを持ってきてくれた。これに「山内」のピッケルが定価三千円と出ているのを見て早速手紙で予約を申し込んだ。この代金は第五回名古屋国体(昭和二十五年)の山岳部門に参加した時にちょうどいしたお餞別で賄うことができた。この頃はまだ日本山岳協会もなく、日本山岳会が国体の運営にもかかわっていたので、積

さん、堀田さん、藤島さんなどが出席され、初めてお目にかかったように記憶している。

そして国体のすぐ後の十一月下旬勇躍このピッケルを持って富士山に出かけた。富士吉田に夜の十一時半に着き、大石茶屋、中の茶屋を経て馬返しまでの四時間ばかりの夜道を歩いて仮眠し、正午頃にやっと六合目にたどり着いた。

翌日は雪が降り、一日停滞を余儀なくされたが、その次の朝は一面に青空が広がっていた。生意気な高校二年生は屏風尾根を登ることにし、夏道から右上に吉田大沢を渡っていた。吉田大沢の中は氷が出ていて、ラッセルもなくアイゼンがよく効いた。屏風尾根から派生する枝尾根に取りつこうと、その枝尾根の末端が二つに分かれているところへ登っていった。二本の岩稜の間は幅五〇メ

ートルくらいのルンゼで、浅く雪が積もっているように見えた。ここを相棒が先頭でトラバースし始めた。浅いと思った雪は真ん中では腰までの深さになった。そして三分の二くらい渡ったところで、われわれのラッセル跡の一メートルくらい上手の雪面に、ぱっぱと高さ一〇センチくらいの雪煙を吹き上げてすーっとクラックが走った。何だろうと思っただ途端、そのクラックとラッセル跡の間の幅一メートルばかりの雪面がラッセル跡を埋めるようにずり落ちてきた。次の瞬間には上部の斜面全体が雪煙をあげて動きだし、上方の景色が見えなくなった。後は何がなんだか覚えていない。



2本ある1773番の「山内」のピッケル

泳がなければと思うが、手が動かずうまくいかない。長い時間が経ったようだが数秒で止まった時には、下半身が埋まっただけで、デブリも固まっていず簡単に脱出できた。相棒もすぐそばにいた。止まったところが扇状の台地だったので深く埋まらなかったらしい。雪崩は幅五〇メートルくらい、流された距離は三〇〇メートル以上あった。呆然と立ち上がったが、右手のオーバー手袋とピッケルが失くなっていった。という次第で一七七三番の「山内」を初陣の日に失くしてしまった。

帰宅して早速仙台の山内老にピッケルを失くした次第を書き送り、もう一本同じ番号のピッケルを打ってもらえないかと頼んだら、折り返し「命があつて何よりだ、ピッケルは引き受けた」との厚意あふれる返事をいただいた。こうして新しいピッケルが手に入ったものの、悔しくて仕方がない。翌年(昭和二十六年)受験勉強に追われながら、現場を見ようとお盆過ぎに富士山に出かけ、雪崩に巻き込まれた地点まで登って見たら光るものがある。バンドにミトンがはさまったままのピッケルがあった。

そしてこの年の十一月にはまた富士山に行き、無事登頂を果たした。しかしこの時はピッケルを失くすよりもっとショッキングな事件にであ

った。八合五勺あたりで、上から落ちてくる人を近くにいたパーティーが体当たりで止め、意識のないその人をわれわれが拝借していた六合目の小屋に収容した。しかしもう手の施しようもなく、次第に冷たくなるその人を見守るしかなかった。やがて降りてきた仲間、戸野昭さんに率いられた東大スキー山岳部のパーティーだった。もう半世紀近く前の出来事で、事故の報告のため、急ぎ下山される戸野さんの後ろ姿が大変寂しそうに見えたこと、戸野さんから名刺をいただき、大学生は名刺を持っていくのかと妙なことに感じしたこと、亡くなられた神田さんのご両親からお宅へお招きを受けたが入試直前で辞退したことなどか思い出せないが、二本の「山内」のピッケルだけは昔と変わらない輝きを見せている。

たしか鳥海山麓吹浦の畑中善哉さんが「山内」のピッケルの所持者の会を作ろうとして、名簿作成に取り掛かれたが、完成を待たずに他界されたのは残念である。

## 里山ブームは自然保護なのか

児玉 茂

忙しく時間の取れない都会人に

とって、近郊の山や丘陵地はまたとない「いやし」の場であることは言うまでもないだろう。近頃は身近な「里山の自然」が見直されてきて、里山歩きがブームになってきているらしい。「山」一月号(六三二号)の伊藤敏氏の「身近な自然 雑木林の保全」ということ」というエッセイを読んで、いよいよ「奥山」から「里山」へと対象を移したのかと悲しくなった。また氏の文中の以下の表現には疑問を抱く。

……しかし、このような多様性に富む雑木林は消えようとしている。雑木林の植生が変われば、それに依存する生物はすめなくなる。暗い照葉樹林に移行するにつれ、多様性は失われてゆくのである。雑木林の自然を守るためには、自然の推移に任せるのではなく、人手を加えねばならない。……

多様性という近頃はやりの言葉を使うと何か変わったような気になるが、雑木林と照葉樹林は質の違う森(人為的二次林と自然林)であり、レトリックとしてではなく、種の多様性という意味で言えば照葉樹林のほうが雑木林より遥かに多様性に富むのは言うまでもない。里山ファンの好む生物は、照葉樹林よりも雑木林のほうに多いと言いたかっただけ

だろうと思われる。里山という人工化された自然に人手を加え維持してゆくという方法に問題はなさそうだが、「自然の推移」である「照葉樹林への移行」を阻止し「雑木林の自然を守る」ということが里山を保全する以外の、本来の自然を守ることにつながる何かがあるのだろうか。

「里山」での市民運動は大切だと思いが、山に登る日本山岳会の自然保護運動としては、今や「奥山」にしか残っていない、日本の自然林/自然地域を見守る立場に立つことなではなからうか。

ついですが、雑木林やブナ林に比べて自然林としての照葉樹林への理解が乏しいのはなぜなのでしょう。またまった照葉樹林は現在では沖縄の島々や屋久島、南九州の山などにしか残っていないのだ。

## ファン山群を歩く

中垣淑子

ファン山群は中央アジアの古都サマルカンドから南東へ二〇〇キロのタジキスタン領にある。四千メートル以上の山が四十座以上ある中で五千メートル級の山は十座あり、最高峰は五四八七メートルのチンタルガである。夏は多くのクライマーで賑

わうが、実はトレッカーにとっても魅力的なところだ。私は一九九七年八月に二十日間をここで過ごした。

BC(二四〇〇メートル)には水洗トイレ、シャワー付きの二階建ての家が三棟ある。夜は自家発電で照明がとれる。ほかに食堂、太陽熱利用のホットシャワーがある。

私のガイド、アーニャ(五十三歳)はスポーツマスター、一方ロシア全土から集まってきた岩登り教室の生徒の指導者ユーリはアーニャの夫でありスポーツマスター。マネージャーのミーシャは「二人ともとても有名なんだよ」とかなり遠慮している風だ。

### ■アルウジンの湖

アルウジンの三つの湖を巡る。湖の色がそれぞれに異なり美しい。

### ■チャブラダ峠を越えて

アーニャ、ナージャ(五十八歳)、私にロバ三頭とロバ方二人でチャブラダ峠(三四三〇メートル)を越え、チャブラダ氷河の下の河原にテントを張る。ここからはチャブラダ(五〇五〇メートル)とポドハナ(五一三八メートル)が美しく見える。翌日は私は山をスケッチ。アーニャはどこかへ登りに行った。帰りはタルバス峠(三七四〇メートル)を越える。固く乾いた地面に草が這いつくばるように生えている。棘のある桜



イラスト 宇都木慎一

俳句

早春の上州・吾妻耶山

広渡敬雄

霜晴の轍を漬す轍かな

猟犬の上目遣ひに待ちゐたり

山笹のかすかに春の音擦れり

標のあとにかんじき・続きけり

雪嶺の午後からは眼になじみけり

春を待つ村くまぐまと一望す

コッヘルを雪で洗って発したる

福寿草いのちの色のかたまれり

兎狩二羽ぶらさげて戻りけり

草が見られた。峠からは急なガレを下って氷河の末端に出る。あとはゆるゆると見馴れた道を下った。

■ムウトヌイへ

ロバ二頭とロバ方、アーニヤ、ナージャ、私で最初に三つの湖を巡ったところからさらに登る。四つ目の湖。ピアラ湖は美しいラムネ色だ。次第に見えてくる山をアーニヤは一つ一つ説明してくれる。チンタルガとエネルギア(五一〇五メートル)が大きく迫ってくる。チンタルガとエネルギア(五一〇五メートル)があり、ここにテントを張る。標高三五四〇メートル。ナキウサギの音がする。夕食後、山が夕陽に朱く燃えた。すべてが消え失せた時、女性コーラスが聞こえてきた。

翌日は三八六〇メートル地点まで登ってチンタルガとエネルギアを描いた。アーニヤは小さなピークへ登りに行った。アーニヤは自然が大好きで、ここを去る時も「山よ、ありがとう、さようなら」と何度も振り返りながら下った。

BCで休養している間、羊をシヤシリク(串焼き)にして食べた日があった。タジク人のお爺さんが連れてきた羊を殺し、ミーシヤが解体してヴィネガーに漬け込み、皆で串に刺す。焼くにはアルチャの木が芳香があつて一番いいのだ、とミーシヤは言う。昼食には羊の血を煮て凝固

させたものが出た。シヤシリクは癖もなく、とてもおいしかった。

■ラウダン峠からクリカロン湖へ

今回はアーニヤ、私、スヴェタと四歳になる息子のサーシヤの四人に馬一頭、ロバ二頭と馬方だ。サーシヤは馬に乗る。途中、羊の番をしていたタジクの男の人が、羊のミルクを羊の胃袋で発酵させたアイランを飲ませてくれた。三六三〇メートルのラウダン峠に出ると青いクリカロン湖が見下ろせる。三千メートルの草地まで降りてビビジャンツ湖のそばにテントを張る。

翌日は湖巡り。アルチャの幹はダイナミックにねじれたり、奇妙な形に曲げられたり、地面を這ったりして決まった樹形をしていない。山は大味だが小さな湖と曲がったアルチャの木との組み合わせは日本庭園のようだ、と言ったらアーニヤが面白かった。

次の日は大クリカロン湖へ行く。タジクのユルタが二つあった。ユルタを描かせてもらう。ペリメニ(ぎょうざ)、パン、ヨーグルト、お茶をご馳走になった。BCへは三七五〇メートルのアルウジン峠を越えて戻った。

ファン山群に滞在した二十日間、毎日快晴だったが最後の日にアフガニズ(アフガニスタンからの風)が

吹き出し、山はかすんでしまった。ミーシヤは最後の大サービスでまたシヤシリクを食べさせてくれた。岩登り教室の人たちは私の折り鶴と絵葉書のプレゼントに対して、皆の名前を書いたハーケンを私の首にかけてくれた。

心響く人々

石岡慎介

小さな人間が大きな山岳に出合つて三十年が過ぎた。富嶽霊峰にも三度踏み跡を残した。単独で、三夫婦で、そして長女を伴い、いつも五合目からの定番。長女との思い出は重廣さんを待ってお祝いたい山行だった。

富士はますます異様な山塊となり、痛々しく病んでいるなとも思う。ご来光を仰いで涙することはあつても、これからもどんな機会にどんな岳友とトライするにしても、このお山とどのように向き合ったらいいのか問いつけることだろう。

そんな折、去年七月、新聞紙上で思わず吸い込まれる記事を目にした。富士の新登山道開きとのこと。市民が草を刈り、道標を整備し、八十五年ぶりに新六合目に達するコースを復活したというのだ。

あのガラガラ溶岩や砂礫の富士にも、えもいわれぬグリーンベルトがあるとは聞いていた。常々富士を裾野から歩きたい気持はあったのだが、そんな樹林の登山道から仰ぎ見る霊峰を思うと、胸が高鳴った。

早速決意し、一〇四番で調べる。静岡県裾野市をベースにするもので、同市の山岳協会の勝又さんと連絡がとれた。何と見ず知らずの私たちを「案内しましょう!」と言ってくださった。妻と新幹線に飛び乗り三島へ向かったのは、黄金色に輝くカラマツのシーズンだった。

山を愛する人は、未知の人でもすぐ心がひとつになれるとは思っても初対面。お山が取り持つ出逢いのロマンというやつで、すぐ打ち解けた。氏の4WDで、市立富士山資料館を通過して標高一五〇〇メートルの登山口水ヶ塚まで、たっぶり一時間。刈り込んだシノダケの小道から樹林帯へ、気持が昂揚してくるのにそう時間はかからなかった。

勝又さんをはじめ、裾野市の皆さんが「俺が登山歩道」として愛し、慈しむ気持がよくわかった。ミズナラ、ブナの樹林帯からコケモモ群生地を通り、モミ、カラマツ林を抜けて一九八五、二一五〇、二二七五メートルと標高を上げる。やがて「御殿庭」の名の通り、第三、第二火口

に平行して御殿様も愛でる妙なる山岳庭園が現れた。赤湯の旅館「御殿守」と何か通じて親近感がある。

「百聞は一見にしかず」、これから大勢の岳友とこの悦びを、どうシェアしようかが脳裡をかすめる。カラマツ林は標高とともに、中木、小木と丈は変わるが、宝永南側第二火口の下まで幼樹がヒタヒタと自生高度を上げているように感じた。これから何十年、宝永山周辺の植生が厳しい環境でどう育まれていくか興味を覚えた。第一火口から宝永山麓を一週し、水ヶ塚に下山する約六時間の行程だった。

何とその後、また偶然の出逢いが待っていた。須山登山歩道の経緯は歩きながら説明を受けてはいたのだが、三島駅へ向かう帰路、昭和五年からこの登山道の復活に情熱を傾けておられる渡辺徳逸先生を紹介したという申し出があったのだ。

日本山岳会の、小島島水初代会長(昭和六〇八年在任)とも親交があった方と聞いただけで、雲の上のような大先輩たちに連なっている自分が今、日本山岳会の一メンバーであることを実感し、内心誇りに思った。今年是小島会長の没後五十年という歴史と伝統の重みである。

今年九十七歳の渡辺翁は、山岳会の新参者を優しく、温かく迎えてく

ださった。現役は遠ざかっておられるが、教え子たちの自然保護の会に支えられてとてもお元気そうだった。会員番号一七八四のバッジを見せてくださいましたが、日向の場よりも故郷須山に何か残さんと志す陰徳の士だと思った。現在は市立富士山資料館の名誉館長を勤めておられる。

渡辺翁の長年の夢を実現させようと、六年ほど前から翁を囲む人々が、調査・研究を重ね、ボランティアで登山道復活に立ち上がった姿が彷彿としてきた。徳富蘇峰、冠松次郎、歌人の川田順、俳人の秋桜子、写真家の岡田紅葉など、岳人、文人と出逢い、交流を深められ、すでに一世紀に届かんとする人生の達人。廃道復活の夢一筋の証人に偶然お逢いする第二幕だった。

心血を注がれた渡辺翁、地元有志のボランティアの善意・熱意に触れ、何が自分にできるのだろうか?

「一緒に歩きませんか?」…同期の山岳会メンバーに声をかける。温かい賛同支援を得た。晩餐会の折、静岡支部の水野さんにもお話しした。同期のスタッフと発起人・世話人になって、山岳会のタテ系も一本通しではじめて豊稜の山岳カルチャーは息づいてくるだろう。

「愛峰山の会」「富士に学ぶ会」「須山口登山歩道保存会」「裾野野鳥を守る

会」「サークルあしたか」の行動する市民と郷土愛を分かち合おう。渡辺翁のアルピニズムに触れよう。きつと翁の心の中には、緑の回廊の富嶽が大きく聳え立っているに違いない。ああ、神々も照覧あれ!

「山に祈る」 尾崎 喜八  
流転の世界 必滅の人生に  
成敗はともあれ 人が傾けて  
悔いることなき 心の純粹な  
愛と意欲の美しさ

## チベットに

上野幸人

三月より二カ月間に及ぶ登山活動を  
終え昨夜シガールの町へ着く  
さわやかな朝を迎える  
昨夜降った雨のためだろうか大気が  
湿り気があった  
何カ月ぶりだろうかこの味わい…

朝食のあと、化石を拾いに町外れの山に出かける  
アンモナイトを捜しているといつのまにか山の頂に出ている  
頂上より見渡すと荒涼たる大地が広がっていた  
奥にシガールの町が見える  
そうだ、ここはチベットだとあらためて思う

ここは標高四二〇〇mのチベットの大地であった  
山から降りると沢山の人達が春の農作業をしていた

土を耕す人々

土を荷車に盛る人

やぎを追う子供

畑を起こしている少年

土にまみれている人々

真っ黒い顔をした人々

荒涼たる大地の中でみんな生きていた

ここに人が住んでいる？

と疑問をもつのは僕の詰まらぬ尺度

なのだろうか



笑顔が輝いていたチベットの子供たち

荒涼たる大地の中で生きています  
さまざまな形でみんな生きています  
ただそれだけでいいのだ  
理解しようとするのじたい  
無理をつけようとするのじたい  
無意味なことなのだ

抜けるような青い空と

赤と茶色の大地

そこに生きる人々の笑顔

とても輝いて見えたチベットであった

と

と

と

### 検証「静かなる山」第一部

柴田篤志

昭和五十三年若溪堂から出版された表題の本は、私たち登山愛好者に少なからぬカルチャーショックを与えたはずだ。六年後に刊行された続編とともに百六十八の山が紹介されている。

執筆は川崎精雄氏以下当会会員四名で、現在もご健在である。

本書刊行の趣旨は巻頭で望月達夫氏が述べているように、登山の原点は山を自分で探し企画する手作りの登山が、当時すでに兆しを見せていた大衆登山ブームにより、形骸化していることへの警鐘だと私は受け止

めている。

この本で紹介された山々は一部の例外を除き、ほとんどがそれまで無名の存在で、現在のJR東日本管内に限定されており、現在でも一般的な案内書に記載されることはまれで、道標はむろん登山道も未整備で、一応のレベルに達した登山者でないと歩けない点が深田百名山と対照的だ。しかしすでに全山を破踏したご仁もいると仄聞している。

本書を案内書としてとらえるか、紀行文として観賞するかは極めて至難だが、刊行以来約二十年が経過し、社会環境の変化などにより静けさが保たれている山もある反面、必ずしも静かでない山もあるわけで、そんな事例を私が最近歩いた事例から抜粋してみた。本書を案内書として活用すること自体が趣旨に対して邪道であることは承知のうえである。因みに私は六十四座の山頂をほとんど単独で踏んでいる。

高川山 標高の割に富士山などの眺望に恵まれ、首都圏からも近く交通の便がよいことや、直接取り付ける好条件がそろっており、登山道完備、道標も多く、奥多摩、奥武蔵の人氣コースとさほど変わらない。私が訪れた春の休日の山頂は、座る場所探しも苦労した。里道がいくらかかわかりづらいが、富士急沿線からの登路

は比較的静けさが保たれている。

笹子ヶ腹摺山 笹子駅から登山口までの長い国道歩きが難点でも、基本的には高川山と同じだが、山頂付近に放置された電波反射板が興ざめ。問題はここからのコースで、旧笹子峠へ下ると車道歩きが長く、またお坊山を経由、大鹿峠から笹子へも同様で、大鹿峠から田野経由甲斐大和(旧初鹿野)へが無難だろう。なお大鹿峠から滝子山登山道合流点付近まで遊歩道の工事中で歩きにくい。

甲東不老山 上野原駅から山麓へのバスは便数も多い。山麓には道標もあり、山道も比較的良好整備されている。山頂では眼下の中央高速道路合坂SAへ出入りの車の騒音が耳障り。

雨巻山 水戸線岩瀬駅から山麓の前根地区など水戸線の北側のバス路線はすでに全廃された。山頂を除き標識は皆無で、取り付き地点の判断に読図力を要求されるが、道はよく踏まれている。ただ上空に陸上自衛隊のヘリの訓練空域があり、猛烈な騒音だ。仏頂山方面への縦走は、七曲峠付近で大規模な伐採のため困難で、県道を迂回したほうが無難だろう。なお岩瀬駅からタクシー利用の場合、水戸線の南側の有名な雨引山方面に運ばれる懸念があり、行く先の確認が肝心だ。

## 図書紹介



★紹介図書は全て税別価格です

石川 溥・著

### 「ネパール」アジア読本

ネパールを知ろうとすれば、T・ハーゲンの「ネパール」を読めといふのが常識だった頃に比べ、世の中便利になったものである。これを読めばネパールの現状について一通りの知識が得られる。それに、それぞれの記事の内容は確かなものである。しかし、これは「暮らしがわかるアジア読本」の一冊、二十三人もの執筆者が五十近い項目について書いているのを通読するのは煩わしい。百科事典のように必要な項目をその都度拾い読みするといった使い方が適当なのだろう。それと登山、探検、観光の参考文献のリストは、エルゾングのアンナプルナが入っているのに、ハントのエベレスト登頂や、日

本のマナスルの報告が漏れていたりして、何を基準に選んだのか理解に苦しむ。

ところで昨年ネパールのトレッキングに出かけた折、子供に小銭を与えている日本人に、青目のトレッカーが物乞いを覚えさせてはいけないと食ってかかるのを目撃して、以前読んだ英国人の書いたトレッキング案内に、子供に金をやるな、歯医者がいけないのだから子供に甘い物を与えるのは残酷な行為である、などの注意が厳しく書かれていたのを思い出した。考えてみれば、物売り、物乞いは気前のよい日本人にしか付きまとなない。海外で日本人ツーリストの被害が増えているのは、このような問題と無関係ではあるまい。外国を訪れる日本人に、現地の人に接するマナーをまず教えるような案内が一冊くらいあってもよいのではないかと思う。(山本健一郎)

一九九七年三月 河出書房新社発行 三三四ページ 二千円

フリットヨフ・ナンセン・著  
太田昌秀・訳

### 「フラム号 北極海横断記 —北の果て—」

著者はノルウェーの探検家、政治家であり、のちに難民救済などの功

績によりノーベル平和賞を受賞した。そのナンセンの一九九三〜九六年度の探検記の全訳。

ナンセンは、海流のままに船を漂流させて北極点に近づくという独自の考えを実行に移し、氷の圧力に耐えられるフラム号を建造した。そして北極海を漂流する途中でヨハンセンと二人で船を降り、犬糞とカヤックで北極点を目指す。北緯八六・一三度で引き返し、一冬の越冬をへて生還する。またフラム号もスウェルドルップ船長の指揮よろしく無事に帰還したという。

この探検物語は実に感動的である。ノルウェー極地研究所にも勤務した訳者に人を得て、見事な一冊になっている。(横山厚夫)

一九九八年一月 ニュートンプレス発行 A4判 四一八ページ 八千五百円

山と溪谷社・編

### 「日本のクラシックルート」

かつて「山溪」に連載された同名のシリーズを大幅に増補して一冊にまとめたもの。日本の山の主要かつ「古典的」な岩場が七十四ルート、いくつかの積雪期と氷雪登りを含めて紹介されている。

筆者はいずれも現役のクライマー。

的確に選ばれた写真やルート図と相まって、至れり尽くせりの岩登りガイドになっている。要所にはさまれた登山史関連のコラムもいい。これから岩登りを始める若い人たちには格好の贈り物である。

とはいえ岩や氷雪からリタイアした人たちが、この本は大いに楽しめる。思い出のルートにキネツカがうずき、足の裏がむずむずするのはパークライミングの醍醐味である。「これらのルートの歴史的背景や初登者の想いを理解し、登攀することができます」という編集方針に共感するでしょう」という編集方針に共感する。(平井吉夫)

一九九七年十一月 山と溪谷社発行 一九〇ページ 二千六百元  
(本会ルームにて二千五百円で頒布しています)

本多勝一・著

### 「リーダーは何をしていたか」

過去に起きた山岳遭難事故で、リーダーの過失責任を問う訴訟が起きたものの五例を中心に取り上げ、綿密な取材を基に、著者の視点での論評でまとめられている。

いづれも論外といえるほど実力の伴わないリーダーが引き起こした、痛ましい遭難事故ばかりである。著

者はそれらを「無免許運転のバス運転手がそうとは知らずに乗ったお客さんを巻き込んで引き起こした事故」と例え、登山におけるリーダーの資格とは何かを問いかけている。さらにいずれの事故にも共通して、リーダー側が自らの非を一切認めない態度を取っていることに、日本の精神風土に根ざす重大な問題が存在するような気がした。

だがまた一方で、本格的登山を志す若者が減少し続けている日本登山界の現状を思うとき、登山界の底辺を広げるための指導者を育成することは急務であり、この問題の難しさを感じる。

一九九七年七月 朝日新聞社発行  
三六二ページ 文庫版 六百元

廣瀬 誠・著

### 『越中の文学と風土』

誰でも幼い日の山、ふる里の山には格別の感慨を寄せる。著者(公員)の郷土・立山への情熱もまた並々ならぬものがある。

前二著に続き、この度多年にわたる研究の成果を出版。年の瀬の迫ったある日、「拙いながら私の主著三部作とも申すべきかとひそかに……」の言葉とともに送られてきた。正月の読み初めとなり、著者の真摯な

学究としての取り組みに深く打たれた。

本書は、風のまほろば、川のまほろば、鳥とけだもの、歌のまほろば、山のまほろば、雪のまほろばなどの構成だが、生涯を富山県立図書館に、最後は館長として奉職したいわば文献資料検索のプロである。しかし著者は現地を足で確かめる方針を貫き、これが本書の強みになっている。

千年の歴史を持つ立山、登ったことのある人にも、これから登る人にも、すべての人々にお薦めしたい。

一九九七年十二月 桂書房発行  
四六〇ページ 五千八百円

川見博美・著

### 『雪の尾根 読書の丘』

本書を手にして、三五〇ページの本を自分でワープロ打ちしたこと昔から丹念に記録を残していたこと、そして製本以外全て一人で作成したそのエネルギーと山への思い入れに對して驚いた。

一九九二年五月に著者は剣岳で滑落負傷したが、本書はその剣岳遭難記から始まり、国内山行記録、海外の山、エッセイ、追悼と続き、最後に書評を載せている。一度読み出すとなかなかやめられないが、それは

内容とともに、かつて若き時代に「もの書き」を目指したという著者の彫琢された文章のうまさによるものだろう。一気に読ませる山行記録も面白いが、臨死体験やカラコルム登山史、そして「山以外の本三冊」の書評も随所に著者の人生観、世界観が出ていて、なかなかのものであり、京都の岳界に静かな波紋を広げているのもむべなるかなの一冊である。

一九九七年八月 三四八ページ  
私家版  
(松田謙介)

森下博三・著

### 『氷層の丘』

一九四九年乗鞍岳コロナ観測所建設にあたり、その試験観測から参加地元高山測候所育ちの山男として立地調査、建設、立ち上げに従事。竣工後は風雪の中で観測所を守り、山の経験のない観測所員の生命を預かり骨身を削った。

この本はその苦闘の手記、乗鞍とコロナ観測所に対する著者の思いがひしひしと伝わってくる。通称「かもしか仙人」の著者のことは『かもしか仙人』乗鞍コロナ観測所物語(早乙女緩次・著 銀河書房刊)として八年前に出版されている。本書は四章と行動日誌、あとがき

からなっており、一〜三章は二十の手記、四章はアルプスの動物、植物自然現象の三つにまとめている。題名は二章三項の「氷層の山―秋の冷雨で全山氷結」からとられたもの。三章五項の地下足袋党―日本山岳会でのひととき、横さんも松方さんも地下足袋党……一九五二年(昭和二十七年) 当時は氷雪上のみ靴で、後は地下足袋が岳人一般の足元であった。

三〇〇〇メートルの山に生きる、山の美しさ、危うさ、命の極限を知る好著であろう。

一九九七年十二月 新樹社発行  
一九七ページ 千八百円  
(三沢 一三)

**創業29年目**

**98 NEWS**

- ① 初夏のアルプス・フラワー・ハイキングは8日間で**298,000**円。
- ② 初夏のロッキー・ハイキングは7日間で**316,000**円。
- ③ ノースウエスト航空アンカレッジ直行便で**アラスカ**へ。
- ④ 幻の青**ブルー・ポピー**を求めてインド・ヒマラヤへ。
- ⑤ チベットの未開放地区**チュンビ**溪谷と**チョモラーリ**。
- ⑥ カムチャッカ半島**アバチャ山**ハイキングと登山。
- ⑦ 南米アンデスの新コース**ワイワッシュ**と**インカトレール**。
- ⑧ ネイチャリング・ツアー**花の山旅**エーデルワイスと青いケシ。
- ⑨ 毎年好評南アルプス**聖・光・赤石・荒川岳**。
- ⑩ ヤマケイ槍穂高登山教室が**北アルプス**に全城拡大。

運輸大臣登録旅行業第490号/日本旅行業協会正会員

**アルパコサービス株式会社**

〒105-0003 港区西新橋1-12-1(西新橋1森ビル) TEL.03-3503-1911  
大阪 ☎06(444)3033 名古屋 ☎052(581)3211 福岡 ☎092(715)1557

## ネパール国際山岳博物館募金応募状況

表記の募金にご協力をお願いしたところ、早速多数の方々からご応募をいただきました。会報に逐次ご芳名を掲載し、お礼に替えさせていただきます。(敬称略) 57名/315口/1,578,827円

- |  |   |   |
|--|---|---|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>● 100口 (500,000円)<br/>橋本龍太郎基金</li> <li>● 40口 (200,000円)<br/>岩崎元郎</li> <li>● 20口 (100,000円)<br/>斎藤惇生</li> <li>● 14口 (73,827円)<br/>今西元会長を偲ぶ会</li> <li>● 10口 (50,000円)<br/>大森薫雄</li> <li>● 8口 (40,000円)<br/>大森薫雄出版記念会</li> <li>● 6口 (30,000円)</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>伊丹紹泰 絹川祥夫 村井龍一</li> <li>● 4口 (20,000円)<br/>鯨坂青青 大屋悌二(故) 坂倉登喜子 柴崎徹 穴田雪江 五十嵐篤雄</li> <li>● 3口 (15,000円)<br/>中原寛</li> <li>● 2口 (10,000円)<br/>河野之保 藤本眞弓 鈴木敬吾 小倉厚 鳥居和雄 中島伊平 織田澤美知子 山口定男 山本幸生 風見武秀 三渡忠臣 田邊信行 福田光子 藤平正夫</li> </ul> | <ul style="list-style-type: none"> <li>南井英弘 山口俊輔 富田弘平 島津慶子 青木義明 法政大学 体育会山岳部 飯沼和男 木村勝久 芳賀孝郎 高原カズミ 高原三平 高木徹 錦織英夫 高澤光雄 水野公男 大島輝夫 山口峯生 藤本慶光 高田眞哉 秋月良造 片岡博 熊崎和宏 川崎精雄</li> <li>● 1口 (5,000円)<br/>宗實二郎 宗實慶子 野田尚志 開發秀三</li> </ul> |
|--|---|---|

### 図書受入報告 (1998年2月)

著者	書名	ページ・大きさ	出版社	出版年	寄贈/購入
向一陽	日本の自然はなぜ荒れたのか：非自然の風景	222pp/19cm	共同通信社	1997	著者寄贈
小野有五	アルプス・花と氷河の散歩道	189pp/22cm	東京書籍	1997	著者寄贈
式年遷座記念誌刊行会(編)	鳥海山：自然・歴史・文化	394pp/21cm	鳥海山大物忌神社	1997	林稔氏寄贈
阿部和行	中仙道は自転車で	47pp/26cm	阿部和行(私家版)	1998	著者寄贈
バードソル 他(著)山本健一郎(訳)	ミニヤコンカ初登頂：ヒマラヤの東・横断山脈の最高峰	258pp/20cm	ナカニシヤ出版	1998	訳者寄贈
川井英憲(編)	神奈川県立丹沢登山訓練所31年の歩み(昭和41～平成8年度)	/30cm	神奈川県山岳連盟	1997	発行者寄贈
文部省登山研修所(編)	文部省登山研修所30年の歩み(昭和41～平成8年度)	261pp/26cm	文部省登山研修所	1997	発行者寄贈
辻村伊助	スイス日記(平凡社ライブラリー No. 235)	479pp/17cm	平凡社	1998	出版社寄贈
富田弘平(編)	山との出会い：山の随筆集(新ハイキング選書 No. 19)	325pp/19cm	新ハイキング社	1998	出版社寄贈
中山建生	雪山に入る101のコツ：バックカントリー入門	229pp/22cm	権出版社	1998	出版社寄贈
串田孫一 他(共編)	月山(日本の名山 第3巻)	249pp/20cm	博品社	1998	出版社寄贈
D. アッテンボロー	植物の私生活	319pp/26cm	山と溪谷社	1998	出版社寄贈
滑田広志	ニュージーランド・ハイキング案内	248pp/26cm	山と溪谷社	1998	出版社寄贈
スネイプ(著)海津正彦(訳)	エヴェレストへの長い道：海拔ゼロから頂上へ	316pp/22cm	山と溪谷社	1998	出版社寄贈
岩崎元郎(編)	雪山[第6刷]：入門とガイド(山溪アドバンスド・ガイド)	237pp/22cm	山と溪谷社	1997	出版社寄贈
遠藤晴行	ピッケル&アイゼンワーク(How to Enjoy Mountaineering Series)	99pp/22cm	山と溪谷社	1998	出版社寄贈
白旗史朗	ROCKY MOUNTAINS：白旗史朗写真集	190pp/37cm	山と溪谷社	1997	出版社寄贈

# 会務報告

## 【二月理事会】

日時 二月十二日(木) 十八時四十分

～二十時四十分

場所 日本山岳会会議室

〔出席者〕 斎藤会長、小倉、竹内各副会長、吉永、田邊、伊丹、熊崎、絹川、勝山、村井、飯田、鯉坂、増山、森、大蔵、宇田川、宮崎各理事、石橋、神崎各監事、平山、穴田、中川、中村各常任評議員

〔委任〕 大森副会長、坂本理事、長尾、平野各常任評議員

○議事に先立ち、逝去された大屋理事の道子夫人が出席され、遺志により本会への寄付と、生前の厚誼に対する謝辞を述べられた。

### 【審議事項】 司会進行＝絹川理事

(一) 秩父宮記念賞の件 竹内副会長  
一月二十九日、第一回検討委員会を開催し、実施大綱(案)を審議、二月二十五日に宮家関係者を含む有識者による懇談会形式での審議を経て、次回理事会に提案する。了承

(二) ネパール・トレッキング 吉永  
ネパール観光年(一九九八年)にあわせ、会員サービスの一環として、建設中のポカラ国際山岳博物館および自然保護委員会が実施しているシ

バプリ・シヤクナゲ植林計画の理解を深め、NMA(ネパール山岳協会)との交流を名分に、旅行会社の企画にJACが会員参加の形式で実施する。期間 十月末～十一月中旬の九日間 「山」五月号に広報の上、ハガキによる参加申し込みとする。承認

(三) 推薦状交付要請の件 絹川  
「クロスビーク一九九八 ド・イザナ隊」宮沢美渚子(本会会員)隊長代理より、ネパール・クロスビーク(八五〇メートル)登山にあたり、本会および日山協の推薦状交付要請がなされた。承認

(四) ネパール国際山岳博物館建設募金の件 伊丹  
現在進行中だが、各理事は担当委員会委員に対し、募金依頼(一人二口以上)の要請など善処を。了承

(五) ホームページ英語版の件 増山  
一月十三日、本会ルームでヒマラヤ・データベースのインデックス・フォームに関して検討の結果、①新しいインデックス・フォームを完成させる。②新しいフォームに基づいてJACのデータをまとめ始めるとともに、HAJや「山溪」の一部データを入力して、技術的な検討を行う。

③三月初旬に日山協、労山、HAJ、JAC、「山溪」のトップ級で構成される情報の集中管理に関する連絡委員会(仮称)を開き、大枠を定めることが合意された。承認  
(六) 展覧会後援の件 絹川  
河口湖美術館より三月二十八日～六月二十八日、足立源一郎展の開催にあたり、本会の後援要請が文章で出された。承認  
(七) 中高年登山者対策シンポジウムの件 大蔵  
①(佛山と溪谷社より、四月三～五日、東京池袋サンシャインビルで開催の「アウトドアズ・フェスティバル98」に表題のシンポに対する問い合わせ依頼があり打ち合わせを終了。承認  
②このシンポは「健康登山推進会議」(仮称)として開催し、六団体として正式参加表明をしてほしい旨の依頼があった。見送り  
③(佛山と溪谷社より、右イベントの会場展示として、大町山岳博物館保管の「切れたナイロンザイル」「マナスル登山隊のテント」など登山用品借用願いが出された。承認  
(八) 同好会からの依頼の件 大蔵  
①「山の自然学講座」で現在、「山の自然学解説員(九名)」を設けているが、現地講座や調査研究において、明確に証明するものがない。別記のような証明カードの発行に対して、(財)地球環境基金助成によって始められた事業の継続として同基金は記名を認めている。責任者大森弘一郎会員より本会ではいかがかとの問い合わせ

## ●新ハイキング選書●

●第20巻好評発売中●

# 一等三角点の山々

山口ゆき子/横山 隆/高柳生雄/川越はじめ/  
岡村美邦共著

A5版・310頁・定価1680円(税込)掲載の山 80山

新ハイキング社の一等三角点の山シリーズの三部作「一等三角点の名山100」「一等三角点の名山と秘境」「一等三角点の山々」が発売

※3冊とも山は重複していません

## ●日本山岳会選定●話題の本●8刷増刷

# 日本300名山ガイド

〈東日本編〉〈西日本編〉

市川静子、岡田敏夫、岡部紀正 A5版・320頁

川越はじめ、廣澤和嘉 共著 定価各1680円(税込)

※著者はすべて日本山岳会会員です

新ハイキング社 東京都北区滝野川 7-6-13

☎(03)3915-8110 振替 00130-9-146915

## 第3回登山と高所環境に関する国際医学会議 松本市で開催

国際登山医学会 (I AMM) と日本登山医学研究会共催による表記の医学会議が松本市で開催されます。低酸素の基礎医学、高地住民・健康と環境、登山のための医学、山岳救助の方法論、そして市民向け公開講座 (エベレストシリーズ) など、盛り沢山のテーマを用意しています。ぜひご参加ください。

FAX ・ 0263-37-0666

内容・特別講演 (J・ウエスト氏他)

- ・高所トレッキング
- ・遠征登山のための医学講座
- ・市民公開講座 (登山の楽しみと高所医学の役割)
- ・特別講座 (登山医学の歴史)
- ・各種シンポジウム
- ・酒沢カール山岳救助隊技術供覧 (5月25日)
- ・上高地・安曇野 1日ツアー (5月25日)
- ・奥穂高登山 (5月26日)

\*詳細は2月号に掲載してあります。

### 記

日時 5月20日(水)~24日(日)  
場所 ホテル・プエナビスタ  
松本市本庄 1-2-1  
TEL ・ 0263-37-0111

わせがあった。 委員会専任事項

③ネパール・ラリグラス植林について地球環境基金の申請をした。報告  
(丸) 小倉副会長より、吉沢名誉会員の葬儀に際して、本会より弔辞、皇太子殿下よりの弔意電話を伝達。

### 【委員会報告】

#### ●財務委員会・吉永

予算、決算、事業報告は別紙通り。

#### ●海外委員会・伊丹

①アルバータ峰七十五周年祝賀行事に対する合意書をカナダ山岳会と交わした。

②労山総会およびチョモランマ壮行

会(二月十四日)の招待を受けた。  
●青年部・宇田川

「カンチエンジュンガ登山隊一九九八」に関して、壮行会は二月二十八日、留守本部マニユアル作成、三月八日、先発隊出発予定。

#### ●総務委員会・絹川

①岐阜支部より「日本山嶽志」現代語版執筆と編集については別紙資料通り、各支部への依頼事項は二月二十二日の事務局担当者会議で伝達。

②支部事務局担当者会議は二月二十一~二十二日、東京グリーンホテル水道橋、および本会ルームで開催。

③曾曙生中国登山協会主席を囲む夕食会を二月十八日、アルカディア市ヶ谷にて開催。

#### ●指導委員会・熊崎

三月十四日開催のスポーツ・コーチ・サミットに出席の予定。

#### ■会員異動

##### 物故

松久幸司(八〇三四) 9・12・31

仲谷千秋(九八七七) 9・11・20

久保清右衛門(五五八八) 9・10・19

梅村洋一(一〇四二〇) 9・12

久野英一郎(五八七九) 10・1・11

田口謙之介(八三〇五) 10・1・17

高見和成(八〇六一) 10・2・22

##### 改姓

三井恵子(一一八三三) ↓三木

## ルーム日誌

27日	青年部 高所委員会 94同期会
26日	集會委員会 総務委員会
25日	秩父宮記念賞委員会 自然保護委員会
24日	フィルムビデオ委員会 山げらの会
23日	緑爽会
20日	青年部 高所委員会
19日	科学委員会 学生部
18日	山研委員会
17日	三水会 データバンク研究会
16日	図書委員会
14日	総務委員会 資料委員会 図書管理委員会
13日	青年部
12日	理事会 集會委員会 青年部
10日	二火会 アルパインスケッチクラブ 93同期会
9日	山岳編集委員会 図書委員会 アルパインスキークラブ 93同期会
7日	青年部
6日	フォトビデオクラブ
5日	総務委員会 山の自然学
4日	常務理事会 会報編集委員会
3日	アルパインスケッチクラブ
2日	総務委員会

# INFORMATION



## 第三十六回木暮理太郎翁碑前懇親会

山梨支部

第三代会長・木暮理太郎翁の碑前懇親会は、日本山岳会の恒例行事であるウエストン祭、有志閑談会に次いで古い伝統を持っています。昨年は土砂降りの雨の中、金山平で行われ、有井館の懇親会ではイワナの骨酒を心ゆくまで賞味しました。そして快晴の翌日、八丁峠から黒富士登山を行いました。本年も新緑と山菜の甲州路へぜひどうぞ。

日時 五月二十三日(土)、二十四日(日)  
場所 山梨県北巨摩郡須玉町金山平  
交通 JR中央線韮崎駅下車 増富  
温泉行き山交バス終点下車

徒歩九十分(タクシーあり)  
行事 二十三日 十八時より懇親会  
二十四日 朝・碑前祭 のち

車で移動 記念山行  
宿泊 金山平 有井館

TEL・〇五五一一四五一〇四五五

山行 甲府市北郊 興因寺山(三等

点 八五四・五メートル)展

望良好 地形図・二万五千図

「甲府北部」

会費 一泊三食(懇親会費、記念品

代を含む) 帰路甲府駅までの

交通費とも 一万円

申込 五月二十日までに千四〇〇-

〇〇一六 甲府市武田三一六

一七 山村正光

TEL・〇五五二一五一三二七五

主催 日本山岳会山梨支部

◆歴史探訪の散策

「富士山新登山歩道」

95同期会企画

集委会委員・静岡支部協賛

昨年、裾野市から新六合目に達する登山歩道が八十五年ぶりに復活しました。市立富士山資料館名誉館長波辺徳逸先生と市山岳会のボランティアの方々の情熱によるものです。地元の方々と交流するとともに散策を楽しみ、山岳文化を豊かなものにしませんか。

日時 五月三十日(土)〜三十一日(日)

集合 三十日十六時 裾野市遊湯の

郷「大野路」

TEL・〇五五九一九八一六六一六

波辺翁講話 裾野市山岳愛好

会と懇親会

散策 三十一日 大野路―バス―水

ヶ塚登山口―御殿庭―宝永火

口(往復) 六時間の行程

費用 一万四千元(一泊二食 二日

目昼食 保険 写真 通信費)

定員 三十五名

申込 千二六三〇〇四三 千葉市

稲毛区小仲台八―二―三―

二〇八 富田合子宛 官製ハ

ガキに会員番号、氏名、年齢

住所、電話番号を明記

\*95同期会口座への振り込みを

もって正式参加としますが、

ハガキ申し込みの方には現地

への交通等詳細要項を送付し

ます。

締切り 五月七日(木)

問合せ 95同期会・石岡慎介

TEL・〇四七―三九一―三二一六

◆「赤シャツ土曜会」新出発

おそろいの還暦記念の赤いセーターを着た赤シャツグループと、年齢を問わず集まっている伝統ある土曜会が手を結び、新しいクラブライフを目指します。行事は毎週の集会で懇親とお酒を楽しみ、年二、三回の軽い山行、先輩や他のグループとの交流、その他会員の楽しい企画で多彩なイベントを行います。

会は代表者一名、幹事数名をおき

ます。幹事は、総務、会計、山行、

企画の仕事を担当します。

発起人 神谷 恭平

坂倉登喜子

内藤 勇

年会費 千円(予定)

申込連絡先 千一〇二一〇〇八一

東京都千代田区四番町五一四

サンビュウハイツ四番町

日本山岳会内赤シャツ土曜会

以上の通り新しい出発をしますの

で、ご賛同の会員の皆さまのご連絡

をお待ちしております。(神谷恭平)

■訂正 三月号六ページ三段五行目

十四シートは三十四シートの誤りで

した。お詫びして訂正します。

◆編集後記◆

カンチで高所暮らしをしている青年部登山隊にエールを送り、成功と無事を祈ります。また遠藤京子隊も、すでにバルトロで汗を流しています。無償の労力をものもしない山一筋の生きざまに感銘を覚えます。ひるがえって会員各位もそれぞれの個性豊かな山を大切に育んでいただければと考えます。(村井 葵)

日本山岳会会報 山 635 号

1998年(平成10年)4月20日発行

発行所 社団法人日本山岳会

〒102-0081

東京都千代田区四番町5-4

サンビュウハイツ四番町

TEL 東京 (03)3261-4433

FAX 東京 (03)3261-4441

発行者 斎藤惇生

編集人 村井 葵

印刷 株式会社 双陽社